

タイの高校での放課後オンライン日本語教室における日本語学習者 に対する発話を促す実践

Practice of Encouraging Japanese Language Learners to Speak in After-School
Online Japanese Class in Thai High Schools

飯島雅人

Masato IJIMA

鳴門教育大学

Naruto University of Education

要旨

本研究は、タイの高校生を対象とし、タイと日本を繋いだオンラインでの活動を実施することで、タイ人日本語学習者の発話を促すことができるかどうかを明らかにすることを目的とした。調査結果から、①「タイでの授業で学習した日本語の文法や単語の復習」、②「①で学んだことを活かした応用練習」、③「自分が関心を持っていることについての発表」の3つの段階を含む活動を取り入れることで、発話を促せたことがわかった。そして、上記に加えて学習者の身近なテーマを用いることや、学習者のニーズを満たすことが発話を引き出す要因となることもわかった。また、活動を通して、タイ人日本語学習者の日本語を話すことに対する自信にも変化が生じた。定期的に日本人と会話をするのが参加者の日本語での発話の自信の向上につながる要因となった。今回の結果から、オンライン形式の活動でも発話を促す活動が実施できることが明らかになった。

キーワード：日本語教育, オンライン授業, タイ人日本語学習者, 学習者の発話

1. はじめに

タイ国の中等教育機関では、新型コロナウイルスの影響により、2021年度の授業が対面授業に代わりオンラインでの授業中心となった。出入国に制限がある中でタイを訪れる日本人が減り、日本人との交流の機会が失われてしまい学習者の日本語での発話の機会も失われた。筆者の知人のタイ人教師の学校の中には、これまで配属されていた国際交流基金の日本語パートナーズの派遣がなくなり、日本人教師との授業の機会が失われたことで日本人と接する機会が全くなくなってしまったという学校もあった。

本研究では、タイにいる学習者と日本にいる筆者をオンラインで繋ぎ、「はなそう日本語」と題した授業外活動を実施し発話の機会を設けることで、学習者の日本語の発話を促すことにつながるかどうかを明らかにする。

2. 研究目的

本研究の目的は、発話を促すために、①「タイでの授業で学習した日本語の文法や単語の復習」、②「①で学んだことを活かした応用練習」、③「自分が関心を持っていることについての発表」の3つの段階を含む活動をオンライン形態で実施し、その活動を通して、オンラインの場においても生徒が積極的に発話できたかどうかを明らかにすることである。

3. 活動実施に向けて

「はなそう日本語」の活動を始めるにあたって、参加者のニーズや、通信環境の実情を把握するために事前調査を実施した。

3.1. 事前調査の概要

事前調査の目的は、「生徒たちのオンライン参加の様子を確認すること」、「生徒たちがどのようなことに関心を持ち、どのような能力の向上を求めているのかのニーズ調査をすること」、「オンライン形式の活動の適切な進行方法および活動時間を明らかにすること」の3点とした。

週に2回オンラインツールを用いて1時間程度の活動をおこない、各回でテーマを決め、そのテーマに関連した発表を日本語でおこなった。調査期間、対象者および対象者の日本語レベル、使用媒体は表1の通りである。

表1 事前調査期間、対象者および使用媒体

調査期間	2021年8月16日～9月29日 毎週月・水曜日（全14回）
対象者	タイ東北地方高校1～3年生 約30名
参加者の日本語レベル	文字の読み書きを始めたばかりのゼロ初級学習者から、N5レベル相当の学習者
使用媒体	・Google Meet ・LINE

参加者は、「自分の住んでいる町」や「行ってみたい日本の観光地」などの決められたテーマに関して日本語で発表した。活動を進めていく中で、参加者自身から好きなことを話したいという意見が出てきたため、それ以降のテーマは決めずに参加者自身が好きなことについて発表できるようにした。発表しない参加者は発表を聞いてそれに対する質問をし、お互いに感想などを話し合った。筆者はホスト兼ファシリテーターとして活動全体を進め、活動の中で新たな語彙や文法が現れた場合はその説明した。

活動前後には、活動を円滑にするために次のことをおこなった。LINEを使用して事前にテーマを伝え、テーマに関連した文法や単語をタイ語訳と合わせて共有すること、活動終了後には、その日の発表の良かった点や改善点などのフィードバック、活動の中で新たに紹介した文法や単語をタイ語で説明したものをLINEグループ内のノートに投稿した。

また、日本語での発表に慣れていない参加者もいたため、発表の定型文を作成し、該当する箇所を自分の発表内容に合わせて入れ替えるだけでスクリプトになる簡単なテンプレートも共有した。参加者はその回のテーマにあった情報収集をし、パワーポイント（PPT）の作成などの発表の準備をおこなった。

3.2. 事前調査の結果

3.2.1. オンライン参加状況について

Google Meetを普段の授業でも使用していることから特別不具合は見られなかった。ログインおよび画面共有などの操作にも慣れている様子であった。一方で、Google Meetの機能とは別に、個人が持つ機器の性能が異なるため、マイクが使えず発言ができない場面や、カメラをオンにすることができない参加者がいることがわかった。

対面ではないことと、上記のカメラの問題から、活動中の参加者の様子は音声やチャットの反応でしかわからなかった。参加者の身近なものや、関心を持っている内容の時には、発言量やチャットの書き込みのスピードも上がる一方で、そうでない時には、発表後も沈黙が続くことが多かった。

3.2.2. 生徒たちのニーズについて

ほとんどの参加者が「漫画」や「ゲーム」などに関心を持っていることがわかった。初めは筆者とタイ人教師でテーマを決めていたが、参加者側から自分でテーマを決めたいという意見があったため、第5回以降は参加者自身でテーマを決めるようにした。第2回から第4回のテーマは観光地などの一般的なものから、日本の面白い場所・名物、コンビニを紹介するなど、内容は多岐に渡った。第5回以降、参加者が自由にテーマを選ぶようになると、日本文化や観光地などといったテーマはあまり扱われなかった。

また、第14回目終了後、参加者に参加後のアンケートを実施し、詳細なニーズを聞き取った。知りたいこととして、日本の文化や歴史、文法・語彙・漢字、よく使われる日本語などが挙げられた。

3.2.3. オンライン形式の活動の進行方法および活動時間について

活動では、筆者はタイムキーパーをしたり質問を促したりといったファシリテーター役をおこない、発表の際には、発表者となる参加者に進行してもらうこととした。活動の進行方法については問題はなかった。今回の活動は60分としていたが、発表やその後の会話に多くの時間がかかることと、参加者への事後アンケートの結果から、もう少し時間を増やした方が良かった。

3.2.4. 事前調査のまとめ

事前調査で目的としていた3点について、「はなそう日本語」を実施する上で考慮すべきことが明らかになった。

・オンラインツールについて

Google Meet の使用に関して、タイの授業で使用していることもあり接続や操作に関して問題は見られなかった。引き続き、本媒体を使用して調査をおこなうこととした。使用する機械の性能は個々に事情があるため、できるだけカメラやマイクをオンにできる環境が準備できる人に参加してもらい、より正確な様子を観察できるようにすることとした。

・活動の内容について

参加者のニーズを満たす活動として、筆者から文法や語彙、使用例などを説明する時間を30分作ることや、テーマを決める際には参加者が関心を持ちやすいものを設定すること、また、参加者自身が自由に決められる時間も作ることとした。

・活動の進行方法と時間について

進行方法については、問題は見られなかったため、「はなそう日本語」でも同様の方法で進めることとした。

活動の時間は60分では十分ではなかったため、90分間おこなうこととした。

4. 「はなそう日本語」の活動の実施

事前調査の結果を踏まえて、「はなそう日本語」と題した活動をオンラインで実施した。

4.1. 活動の概要

タイ東北部中等教育機関3校の高校生約30名を対象とした。事前調査に引き続き、オンラインツール「Google Meet」を使用し、「はなそう日本語」と題し

表2 「はなそう日本語」調査期間、対象者および使用媒体

調査期間	2021年11月10日から2022年3月23日 毎週水曜日 全19回
対象者	タイ東北地方高校1～3年生13名 *当初、30名ほどの参加者がいたが、活動を進めていく中で普段の授業の課題との両立や大学への入学試験の準備を理由に人数が減ってしまった。 最終的に残った対象者は、高校1年生6名、高校2年生5名、高校3年生2名の13名であった。
参加者の日本語レベル	高校1年生：文字学習を終えたばかりの初級学習者である。 高校2、3年生：学習歴が1年以上あり、文字と簡単な文法は勉強している。高校3年生には実際には合格はしていないがN5相当のレベルの参加者もいた。
使用媒体	・Google Meet ・Microsoft Teams (一度のみ) ・LINE

た90分の日本語の活動を週に1回おこなった。筆者は、ホスト兼ファシリテーターとして活動を進めた。調査期間、対象者および対象者の日本語レベル、使用媒体は表2の通りである。

内容は既習項目の復習と、定められたテーマや参加者自身が関心を持っている物事について、発表や質問、意見交換など自分の言葉で表現する活動をおこなった。参加者には活動する上での目標を提示しその目標を達成することができたかを記録してもらった。

その後、事後アンケートとインタビューをおこない活動内容が効果的であったか、また、発話機会を与えることができたかどうかを明らかにした。

4.2. 活動内容およびスケジュール

事前におこなった調査の結果を元に、3つの活動に取り組むことで参加者が発話の機会を得られるように内容を構成した。

・既習項目の復習

参加者がタイの学校で学んだ既習項目を使って質問をしたり、筆者からの「Closed Question (CQ)」に回答したりすることで、既習項目を使用しての発話練習をする。

・既習項目を使用したロールプレイ

回ごとに設定したテーマに沿って場面を設定し、ペアやグループに分かれてロールプレイを通して発話練習をする。

・自分が関心を持っていることについての発表

自分が関心を持っていることについて、2～3分で発表をする。

90分の活動のうち、初めの30分は既習項目の復習として決められたテーマに関連した文法やその使い方を確認する時間とし、残りの60分はペアやグループに分かれてロールプレイをしながら実際に使用する活動をおこなった。活動内で取り扱うテーマは、学習者の身近なものとなるようにテーマを設定した。各回のテーマは表3の通りである。

第1回は、活動内容の説明と自己紹介をした。第2回以降は、前半と後半に分け、前半は教科書の内容の復習、後半は自分のことを話す活動ができるテーマを設定した。最終回となる第19回はアンケートの時間とし、全体で質問を確認しながら回答をしてもらう時間とした。

前半(第2回から第7回)は2回ごとにテーマを設定し、各回で紹介する表現をどんな時にどのように使うのかを理解するための活動をおこなった。タイの高校で使用されている日本語教科書『日本語 あきこと友だち1改訂版』(国際交流基金, 2017a; 2020a)と、『日本語 あきこと友だち2改訂版』(国際交流基金,

表3 活動スケジュールおよびテーマ

第1回	11/10(水)	オリエンテーション・自己紹介
第2回	11/17(水)	町の案内(『日本語 あきこと友だち1改訂版』(国際交流基金, 2017a; 2020a) 第2課より)
第3回	11/24(水)	町の案内(発表)
第4回	12/1(水)	交通手段(『日本語 あきこと友だち1改訂版』(国際交流基金, 2017a; 2020a) 第4課より)
第5回	12/8(水)	交通手段(発表)
第6回	12/15(水)	買い物(『日本語 あきこと友だち2改訂版』(国際交流基金, 2017b; 2020b) 第6課より)
第7回	12/22(水)	買い物(発表)
第8回	1/5(水)	わたしの好きな漢字
第9回	1/12(水)	わたしの好きな漢字
第10回	1/19(水)	わたしの好きな漢字
第11回	1/26(水)	自由テーマ①
第12回	2/2(水)	良い1日と悪い1日
第13回	2/9(水)	良い1日と悪い1日
第14回	2/16(水)	良い1日と悪い1日
第15回	2/23(水)	自由テーマ②
第16回	3/2(水)	わたしの将来
第17回	3/9(水)	わたしの将来
第18回	3/16(水)	自由テーマ③
第19回	3/23(水)	振り返り, 活動後アンケート

2017b; 2020b) を参考に「町の案内」「交通手段」「買い物」の3つのテーマを設定した。

後半(第8回から第18回)は、月ごとにテーマを設定し、そのテーマについて自分のことや経験を話す活動をおこなった。テーマ設定に関しては、学習者のニーズや、『NEJ(エヌ・イー・ジェイ): テーマで学ぶ基礎日本語』vol.1』(西口, 2012ac) と『NEJ(エヌ・イー・ジェイ): テーマで学ぶ基礎日本語』vol.2』(西口, 2012bc) を参考に「わたしの好きな漢字」「良い1日と悪い1日」「わたしの将来」の3つを設定した。各月の最後の回は「自由テーマ」とし、参加者が関心を持っていることについて発表する機会を設けた。

全体を通して、疑問を表す言葉を使った例文を多く紹介し、自分が知りたいことを質問できる、また、質問された際に答えられるような練習を取り入れた。

4.3. 活動内の発話

3つの活動の中で生じた発話についてそれぞれ述べる。

4.3.1. 既習項目を復習する中での発話

ここでは、文法や語の使い方の理解、既習項目の復習を目的としているため、学習した文法などについて

の筆者からの質問に対する生徒の回答が主な発話となった。ここでの質問は、既習内容で回答ができるCQを中心としたため、生徒は質問に対してきちんと回答することができた。また、参加した生徒が最低1回は発話ができるように質問をすることを心がけていたため、発話ができなかった生徒はいなかった。

例えば、第2, 3回「町の案内」では、自分たちの町にあるものを紹介できるような活動を取り入れた。取り上げた文法は「いる/ある」である。第2回では、「いる/ある」の使い方を説明し、第3回では、イラストを示しながら「いる/ある」を使って説明をってもらう活動をおこなった。(1)に第3回での発話を紹介する。

- (1) 第3回の活動での実際の発話例(Tは筆者, Sは参加者である生徒を表す)

T: 何がありますか。

S1: 時計があります。

T: そうですね。時計があります。(Tがスライドに書き込む)

T: 何がいますか。

S2: 犬がいます。(Tがスライドに書き込む)

4.3.2. ロールプレイでの発話

第2, 3回では「いる/ある」を使用して自分の住んでいる街のいいところを観光客に教える練習、第4, 5回では観光地までの行き方やかかる時間を聞いたり答えたりする練習というように、(1)で学習したことを利用したロールプレイをおこない、発話練習をした。第6, 7回では「買い物」をテーマとし、ロールプレイでは店員役と客役になり、物の値段を言ったり、尋ねたりすることができることを目標とした。

(2)に第7回でおこなった店員と客の会話のロールプレイでの会話を紹介する。

- (2) 第7回の活動での実際の発話例

S1(店員): いらっしゃいませ。

S2(客): すみません。イヤホンはありますか。

S1: はい、あります。

S2: いくらですか。

S1: 一つ250パーツです。

S2: そうですか。では、2つください。

S1: スピーカーやマイクもありますよ。

スピーカーは一つ500パーツです。マイクは一つ5000パーツです。

S2: そうですか。では、スピーカーを1つください。

S1: はい、ありがとうございます。スピーカー

が1つですね。

全部で、全部で1000パーツです。

S2: お願いします。

S1: 1500パーツ、お預かります。お預かります。お預かりします。

500パーツのお返しです。ありがとうございました。

S2: ありがとうございました。

(2)の活動の前には、ペアワークやグループワークでのロールプレイが順調に進むように、見本となるPPTを作成し、音声も入れて事前に例として示し、次回にやるのがどんなことかの告知をした。それにより、各自がPPTなどを利用して面白い会話例ができるように工夫をしており、話す側も聞く側も楽しみながら発話することができた。

4.3.3. 自由テーマでの発話

自由テーマでは参加者自身が関心を持っていることについて他の参加者に向けて発表をした。発表時間は2分から3分とし、PPTを準備したり、動画を見せたりすることも可能で、形式は自由とした。それぞれが発表をした後には、質問をする時間も設けた。

参加者全員が発表をしたため、それぞれが発話の機会を与えられており、自身が関心を持っていることについて発話することができた。

参加者の発表内容は、「ゲーム、アニメ、YouTubeチャンネル」などが中心となった。イラストを使用したり、実際にYouTubeの映像やゲームをしている画面を見せたりとそれぞれが工夫をしながら発表することができた。

発表の後には、聞いていた参加者が気になったことについて質問をする時間や、発表に関連した話題について話す時間を作り、全体で話をすることもできた。

5. アンケートおよびインタビューの実施

5.1. アンケートの結果と考察

全18回の活動終了後、第19回目にGoogle Formsを用いてアンケートを実施した。

アンケートはタイ語でおこなった。回答はタイ語での回答と日本語での回答があり、タイ語の回答はタイ人教師に協力してもらい、間違いのないように翻訳をした。

まず、活動全体の満足度について、参加者は表4の通り回答をしている。全員が選択肢の【5】以上を回答していることから、満足度の高い活動をおこなうことができたと言えよう。

質問1、全体を通して活動に満足していますか。

表4 質問1、参加者の回答

参加者の回答	
【1】 そう思わない	0
【2】	0
【3】	0
【4】 どちらでもない	0
【5】	1
【6】	3
【7】 とてもそう思う	9

次に、前半、後半の活動についてのアンケートについての回答をまとめる。

前半の内容については表5の通りである。

質問2、前半の内容は分かりやすかったですか。

表5 質問2、参加者の回答

参加者の回答	
【1】 そう思わない	0
【2】	0
【3】	0
【4】 どちらでもない	1
【5】	4
【6】	6
【7】 とてもそう思う	2

それぞれを選んだ理由について、次のように回答した。

【4】を選んだ参加者:「参加者自身の理解度について自分の中で内容を完璧に理解できたと思っておらず、【5】以上は選べない」

【5】を選んだ参加者:「ほとんど理解できたが、テーマによっては理解が不十分な部分があるから」、「実際に習ったことを使用する場面で適切に使うことができない可能性もあるから」

【6】を選んだ参加者:「一度勉強したことがあるから理解しやすかった・使うことができたから」、「授業の内容が簡単で楽しかったから」、「日常生活の中でよく使うことを学ぶことができたから」、「【7】を選ばなかったのは内容を忘れてしまい全てを覚えることができなかったから」

【7】を選んだ参加者:「学習したことを今後のテストなどで生かすことができそうだったから」、「内容が簡単だったから」

後半の内容については表6の通りである。

質問3. 後半の内容は分かりやすかったですか。

表6 質問3, 参加者の回答

参加者の回答	
【1】 そう思わない	0
【2】	0
【3】	0
【4】 どちらでもない	1
【5】	3
【6】	6
【7】 とてもそう思う	3

それぞれを選んだ理由について、次のように回答した。

【4】を選んだ参加者:「内容があまりよくわからなかったが、復習すればわかると思う」

【5】を選んだ参加者:「よく理解ができたが、毎回出席できなかったから」、「将来を考えることができたから」、「できたと思うけれど自信がないから」

【6】を選んだ参加者:「様々な漢字を知ることができた・たくさん覚えることができたから」、「先生が自分の間違った文法を直してくれたり、わからないことを教えてくれたりしたから」

【7】を選んだ参加者:「理解しやすかったから」、「簡単だと感じたから」、「動詞の活用を学ぶことができたから」

最後に、自由なテーマでの発表について、どうだったかを自由記述してもらった。

できなかったことや大変だったことについての感想として、「練習ではうまくできていたのに本番では緊張してしまいうまくできなかった」、「発表のための準備(情報収集など)が大変だった」、「好きなことがあまり多くないので、何を発表するのか決めるのが大変だった」、「自然な日本語でスクリプトを作ることが大変だった」、「説明するときに使う言葉や文法を習っていない場合に調べるのが大変だった」、「質問にうまく答えるのに苦労した」などの回答があった。

また、楽しかったこと、できたことに対する感想として、「発表できたことに対して満足できた」、「友達の発表を聞くのが楽しかった」、「スライドを作るとは楽しかったし、よくできるようになった」、「話したいことを相手に伝わりやすいようにすることができた」、「できないことも、できるようになるまで頑張った」などの回答があった。

アンケートの結果から、活動全体および内容に関し

て概ね高評価が得られたことがわかった。高評価が得られた要因として、参加者自身が知りたかった知識を得られたことや、復習することで理解が深まったことが挙げられる。特に漢字や文法などの知識を得られたことに関して肯定的な意見が多く、今回の活動でテーマとして扱ったことや随所で文法の説明をしたことは内容として良かった点だと言える。中には、内容がわからない参加者や、内容に関しての理解に自信を持っていない参加者もいたため、理解を進める支援や定着度がわかるような工夫が必要であることもわかった。発表に関して、参加者は負担に感じる部分がありつつも、工夫をして楽しみながら発表できたことがわかった。

5.2. インタビューの結果と考察

アンケート集計後、不明確な回答の補完と追加の質問をするために、2～3名ずつの7グループに分け、1グループあたり30～40分を目安にインタビューをおこなった。インタビュー時には、タイ人教師に通訳として参加をしてもらった。

まず、日本語を話すことに関しての変化について、活動に参加する前後でどう変わったかをパーセント(%) (最大は100%)で示してもらった。全員が参加前と比べて増加したと回答した。参加前は全員が50%以下の数値を回答していたが、参加後は1名をのぞいて60～80%と回答した。その理由として、日本語に関する知識が増えたこと、また、日本人と話すことに慣れたと回答があった。

活動の中で役に立ったことは、9名が関心を持っていることについての発表と回答した。発表をすることで、準備段階で情報収集やPPT・スクリプトの作成など、話すこと以外にも様々なことをしなければならず、そのような作業での工夫に加えて話し方や見せ方なども勉強することができたことが理由として挙げた。また、前半で扱った「買い物」や「交通」などのテーマを挙げた回答者は5名いた。その理由として、日常の中で使う言葉を知ることができ、実際に日本に行った時に使えそうだったという回答があった。

インタビューの結果から、発話に対する意識に良い変化があったことがわかった。定期的に日本人と日本語で話すことで、参加者にとっての日本語が彼らの中でより身近なものになり、発話に対してのハードルを下げることができた。また、活動に関して、様々な知識を自分のものにすることができたことや実践的な日本語を知れたことが参加者のニーズを満たすことができた要因であることがわかった。そして、発話することに加えて、相手に伝わりやすくなるようなプレゼンテーション技術、文法や語の選択など、話すこと以外に必要なことに目を向けられたことが参加者にとって

有益であったと言える。

アンケートの結果と同様にテーマや活動内容の設定が参加者のニーズに合致することが、良い活動とするための条件であることも明らかになった。

6. まとめ

今回の活動では、3つの活動に取り組むことで、参加者の日本語での発話を促すことができた。

それぞれ発話の規模は異なるものの、一人一人が質問や回答ができ、発表の際には日本語での発話があった。活動中も、参加だけして発話をしない参加者はおらず、参加した全員に発話を促すことができたと言える。

活動の満足度については、アンケートとインタビューの結果から多くの参加者の満足度を満たすことができた。特に、自由なテーマでの発話の活動に満足していた参加者が多く、彼らにとっては負担に感じる部分がありながらも得られるものも多く、役に立ったと感じたことが満足度につながった要因であろう。

テーマ設定に関しても概ねうまくいったといえる。稲葉（2021）では、学習者の身近なテーマを設定した場合、多くの発話が引き出せたことを述べている。今回おこなった「はなそう日本語」の活動でも、生活の中での日本語や参加者の興味を対象としたことで、発話を引き出すきっかけとすることができたと考えられる。

また、今回の目的は発話を促すことであったが、文法や単語の知識の他、わかりやすい発表の仕方や、発表の構成についても参加者自身で考える必要があった。アンケートの「情報収集やスクリプトの作成、そのための文法や単語の選択などができたことも勉強になった」というコメントから、発話をするために必要となる技術や知識を学べたことも活動の満足度に関係していたことがわかった。

活動の成果が出たと感じた点について、参加者の中でも活動に参加する以前に日本人との会話の機会が少なかった参加者の日本語の上達を感じることができた。初めのうちはなかなか質問に答えることができなかったり、発表が上手くできなかつたりして思うように発話ができなかった参加者が回を重ねるにつれて受け答えがスムーズになり、自信を持って発話ができるようになった。これは、週に1回ではあるが、定期的に日本人と会話をしたこと、そして日本語を使う活動があったことが自分の日本語に自信を持つ要因となったのではないだろうか。

また、参加者自身の変化について、全ての参加者が話すことに関して自信がついたと回答した。その理由

として、日本人との会話に慣れたことが挙げられる。ほとんどの参加者が日本人との会話の経験がない中、定期的に話したり聞いたりしたことで会話に慣れることができ、日本語を話す自信を高められたのではないかと考える。また、参加者自身が様々な知識を得たことも要因の一つであるだろう。特に文法や単語の導入や、発表の構成の提示などのサポートが学習者の自信につながったことがわかった。

そして、今回のような活動はオンラインでも実施が可能であることもわかった。岡田（2020）では、遠隔授業における学習者の発話量への影響について、インターネット環境の問題による授業進行の困難さや、音声面での問題、また、学習者の発言のしにくさによって多少の影響を与えることを指摘している。極力改善するように努めることが望ましいが、オンライン授業の問題は、接続する地域によるネット環境や使用する機器の問題が原因であることが多く、環境や費用によっては機械や技術面での整備には限界がある。今回は、発話機会を十分に与える活動を構成することによって、オンライン形態でも参加者の発話を引き出すことが可能であることがわかった。

今後は、発話に関してより技術を高められるように、参加者自身が自由に発話をし、参加者間のやり取りによって会話の内容が膨らんでいくような活動が必要だと考える。こうした活動を考えることは今後の課題としたい。

参考文献

- 稲葉 茉奈美（2021）。「学習者からより多くの発話を引き出すために—インターアクションの活性化とファシリテーターとしての教師の役割—」、『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』, Vol.12, pp.33–60.
- 岡田幸恵（2020）。「初級日本語学習者の発話を引き出すための一考察」、『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』, Vol.11, pp.241–266.
- 国際交流基金（2017a）.『日本語 あきこと友だち1 改訂版』, 国際交流基金.
- 国際交流基金（2017b）.『日本語 あきこと友だち2 改訂版』, 国際交流基金.
- 国際交流基金（2020a）.『日本語 あきこと友だち1 改訂版教師用指導書』, 国際交流基金.（最終閲覧日：2022年10月30日）：<https://www.jfbkk.or.th/wp-content/uploads/2022/03/Teacher-Manual-Vol.1-2017-JP-2022.2.25.pdf>

国際交流基金 (2020b). 『日本語 あきこと友だち2
改訂版教師用指導書』, 国際交流基金. (最終閲覧日:
2022年10月30日): [https://www.jfbkk.or.th/wp-
content/uploads/2022/03/Teacher-Manual-Vol.2-
2017-JP-2022.2.25.pdf](https://www.jfbkk.or.th/wp-content/uploads/2022/03/Teacher-Manual-Vol.2-2017-JP-2022.2.25.pdf)
西口光一 (2012a). 『NEJ (エヌ・イー・ジェイ): テー

マで学ぶ基礎日本語 vol.1』, くろしお出版.
西口光一 (2012b). 『NEJ (エヌ・イー・ジェイ): テー
マで学ぶ基礎日本語 vol.2』, くろしお出版.
西口光一 (2012c). 『NEJ (エヌ・イー・ジェイ): テー
マで学ぶ基礎日本語指導参考書』, くろしお出版.